

F1CwRC (-) 以下となった。本法は EVL で大きな静脈瘤を消失させた後、硬化療法を施行するので、出血の危険が少なく安全である。食事制限もほとんど不要で、苦痛も少なく、短期間で治療が完了できた。重篤な合併症は認めておらず、これまでの硬化療法に比べ優れていると考える。

13. 胃・大腸腫瘍浸潤における cathepsin D の免疫組織学的検討

(消化器内科)

杉山茂樹

癌の浸潤、転移に関与する ECM 分解酵素の一つである cathepsin D の発現を胃・大腸の腺腫と高分化腺癌を対象に粘膜下浸潤や予後の判定因子について考察した。

〔対象〕胃は腺腫(粘膜内癌を含む) 14例, 早期癌 16例 (penetrating early carcinoma (PEN) 7例, Non-PEN 7例), 進行癌 8例, 大腸は腺腫 12例, 早期癌 18例 (表面型 12例, 非表面型 6例), 進行癌 12例, 免疫染色の抗体は NCL-CDm で labeled streptavidin biotin 法を使用。

〔結果〕①胃・大腸腺腫は cathepsin D の発現は認められず陽性例はいずれも浸潤癌であった。②胃癌は早期癌 (86%) と進行癌 (88%) とで差がなかった。③大腸癌は表面型早期癌 (25%) と非表面型早期癌 (100%) で差があり, 進行癌は 50% であった。④ cathepsin D の発現と ly, v, n, H との有意な相関はなかった。

〔結論〕① cathepsin D は癌の悪性化の初期段階に作用し新しい予後判定因子と考えられる。②胃と大腸とで臓器特異性が考えられた。大腸では表面型癌と非表面型癌の遺伝子関与が異なる可能性が示唆された。

14. ヒト扁桃胚中心に分布する CD56陽性細胞の検討

(¹⁾消化器病センター, (²)第二病理学)

池田郁雄¹⁾・増田昭博²⁾・安藤明子²⁾・

笠島 武²⁾・光永 篤¹⁾・林 直諒¹⁾

〔目的〕これまでに, Leu 7陽性細胞が NK 様細胞と報告され, 胚中心内で免疫組織学的検索が行われた。その後, Leu 7陽性細胞は大部分が T 細胞であると証明された。国際 NK ワークショップで NK 細胞は CD3⁺CD16⁺CD56⁺, CD3⁻CD16⁻CD56⁺ の細胞で細胞障害を示す細胞と定義された。胚中心内の細胞について CD56陽性の検討の報告はこれまでない。最近, NK 細胞は, 胚中心の B 細胞の制御に関係していると, 指摘された。今回我々は, 扁桃の胚中心を用い, CD56陽

性細胞の免疫組織学的検討を行った。

〔方法〕成人 5 例の扁桃を新鮮凍結し, 間接法にて免疫染色を行ない, 連続切片上で比較検討した。標本を写真に取り, 陽性細胞の位置を写真上で確認した。二重染色では CD56 を間接法にて DAB 発色し, CD3 を滴下し蛍光抗体法にて確認した。

〔結果〕CD56 は, 胚中心の中にも存在し, 主に light zone にみられ, mantle zone や dark zone との境界部にも認められた。dark zone にも少数認められた。非常に小さな胚中心の中には, ほとんど認められなかった。二重染色では胚中心の CD56陽性細胞は CD 3 陰性であった。NK 細胞と関連の深い CD16 は, CD56 と同じく, 胚中心の中にも存在し, light zone に多くみられた。

〔結語〕胚中心の CD56陽性細胞は CD3陰性と NK 細胞である可能性が示唆された。light zone に多くみられたことから FDC との関与が考えられる。今後, Leu 7陽性細胞との関連について検討したい。

15. 慢性化した急性肝炎患者における HCV envelope 蛋白質の経時的变化と免疫応答

(消化器内科)

関谷仁美

C 型肝炎ウイルス (HCV) はゲノムの多様性が特徴的であり, 特にエンベロープ蛋白質 (gp35, gp70) をコードする領域のアミノ酸変異は持続感染の成立に関与している可能性がある。我々は, 急性肝炎から慢性化した 2 症例についてこの領域の経時的变化を解析し, さらにアミノ酸レベルで経時の変異を認めた部分に対する免疫応答性を検討した。その結果, 2 症例ともアミノ酸の経時的变化と, その変異した部位に対する抗体を共に認めたのは gp70 の N 末端に存在する超可変領域 (HVR1) のみであった。また, HVR1 に対する抗体は経時の変異を認めたアミノ酸を含むペプチド内にエピトープが存在することが明らかになった。以上より, HVR1 の経時の変異が持続感染の成立に関与していることが示唆された。

16. C 型慢性肝炎のインターフェロン療法における甲状腺機能異常の発症に関する多変量解析を用いた検討

(消化器内科)

渡辺 麗

〔目的〕多変量解析を用いてインターフェロン (IFN) 療法における甲状腺機能異常の発症の危険因子を検討した。

〔対象・方法〕IFN 療法を施行した 109 例を対象とした。甲状腺機能検査は IFN 投与後定期的に測定した。